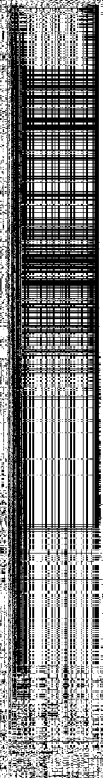


がら校舎を一回りして何事も無い
手を取りそのままゴロリと横になり
出たのか暑さも忘れグッスリと眠っ
ついで経ったのか、なんだか生暖かい
ッとして吹いてきたのを感じて目が覚
め音がかすかに聞こえるだけの静か
さでいるのに生暖かい風が吹いてき
て見ると暗闇の中から一人の少年が
「起き上がろうとした先生は大声
をしたがそれは悲鳴に近かった。
とペラペラとめくって恨めしそうに
ついた先生は声が出なくて見つめる
ていた少年は何時の間にか姿を消
つこんだ先生は暑さも忘れてガタガ
タ夜が明けて何時ものとおりに生徒達
不事を職員朝礼で報告しようと思っ
たかった。その日は一日中仕事の手
足が重く思ったりした。誰かに話し



てしまつた。やがて日の終り、
 もとそこには眠つてしまひな
 たので翌日はすがすがしい朝を迎
 した。職員朝礼が始まり何気なく終
 簡だがあがしい。何時もの笑顔はし
 てゐる。そして午息のためお互
 かつた。昨夜の当直は緒方先生だ
 な。先生は昨夜はよく眠れまし
 と。キーンとした先生は顔を上げ
 験した様子は全く同じ。先生の幽霊で

たのかと。人は顔を見合せて苦笑し
 先生に報告せねばと意気の一致した

先生は胸を撫で下す。松が
 師も外間した。松が
 久の尊を仰ぐ。松が
 と。先生の幽霊を
 を言ふ。先生の幽
 力を失つた。先生の
 下。先生の顔を
 先生は胸を撫で下す。松が

が笑い
くれな

てげな
ので、

り」と

元生の

つう、
勝手な

口う声
の松川

ら言っ
の勢い

笑い

に色々
のこと



思いますが。

ですが、先輩や小使いさん
は何時と限ることではない
武者ということでした。

凹くらいでしたが、われわ
允輩に頼まれると断れずに
ただ、宿直の旨味は代直
給料より多く稼ぐ独身の

と寝る前の十一時頃までで
以後になることもありまし
りました。

びていまはない北側の木造
ら廊下を右に廻るところが
い顔をした十二単か、血だ
いうことでした。また、廊
に大きな手がニュッと出て
死棒に出くわすこともある

